

験使用痕分析の結果を基本とし観察を行った。また、使用痕光沢面のパターンについても基本的にこれまで行われてきた研究結果に従うこととする（梶原・阿子島 1981, 御堂島 1989, 斎野ほか 1977など）。また、使用痕によってできる光沢は阿子島（1989）によって第3表のようにまとめられている。

金属顕微鏡で観察する際には、前処理として石器をよく洗浄し、エタノールで表面をふき取ったあと観察を行った。石器表面に光沢が形成されるメカニズムについては未だに定説はないが、いずれにせよ光沢は岩石表面の一部であって洗浄などで取り除かれることはない。

金属顕微鏡はNikon製 ECLIPSE L150を使用し、画像の撮影にはNikon DIGITAL CAMERA DXM1200, ソフトは「Nikon ACT1」を使用した。観察には100倍, 200倍のレンズを用い、資料の全面検鏡を行いながらポリッシュの発達具合を示す光沢面の分布図を作成した。

ポリッシュの発達具合を示す基準は、パッチの大きさや密度により3段階に分け「中：大きなパッチを含み密度が大きい」、「弱：密度が大きい」、「微弱：密度が小さい（疎）」とした。また肉眼でも光沢が判断できるものを「強」としたが今回の分析では観察できなかった。

4 観察結果

石庖丁と報告されている8点の資料のうち6点でコーングロスパッチが観察された。微小剥離痕やBタイプ光沢に見られるポリッシュパッチが連続的に連なるような現象、及びAタイプ光沢に見られるfilled-in striationとよばれる線状痕は明確に確認できなかった。これらの結果を光沢面強度分布図として第2図に、写真をPic.1～8に示した（写真は上方が刃縁側）。

石庖丁を右手で握った場合は右手親指側の面を主要面とし、その反対面を非主要面とする。左手で握る場合でも親指が当たる面を主要面とし、反対面を非主要面とする。実測図は基本的に左側に主要面を書き、片刃の場合、刃がつけられた面ではなく平坦な面を主要面と考える（松山 1992, 東 2000）。本稿では、報告書に図面があれば機能や形状から想定される主要面・非主要面の定義に関係なく、そのまま実測図を掲載し光沢分布図を作成した（第2図）。

資料No.1

片刃の石庖丁で、左図が主要面である。両面とも体部の数か所にコーングロスパッチが観察され、刃部には見られなかった。刃部と体部を境に光沢が観察できなくなるため、研ぎ直しが行われた可能性がある。

光沢は主要面（左図）では左上方に強く現れ、非主要面（右図）では右側に強く現れた。石庖丁を右手の親指とその他4本の指で挟むようにして持つと仮定した場合、主要面（左図）の左上方部の強い光沢は親指が強く接触してい

たことに矛盾しない。非主要面（右図）の体部右側に強く現れるパターンは人差し指が接する部分である。左図が主要面という前提では、左手で持った場合、親指の接触部分に相当する左図右側に光沢が認められない。よって、右手で持ち、親指と人差し指が強く接していたと考えるのが妥当ではないか。

資料No.2

断面図でも分かるが、非主要面とした右図の刃の方がやや平坦に近い石庖丁である。両面とも体部の数か所にコーングロスパッチが観察された。刃部に光沢が観察されなかったのは刃を研ぎ直した可能性がある。また、右図を見ると刃部を下にして左端に強く現れ、他は散散的に観察されたことが分かる。左図では狭い範囲で数か所に強く現れる部分があった。右図の体部左側に認められる広い光沢斑と右手親指とが強く接触していた可能性が示唆される。さらに、右図の刃部の方が平坦に近いことも合わせると、右図の方が主要面と考えられる。

資料No.3

左右の両面でコーングロスパッチが観察された。両面とも体部のみに現れ、刃部には認められなかった。刃部に光沢が観察されなかったのは刃を研ぎ直した可能性がある。また、右図を見ると刃部を下にして左側に広く中程度の光沢斑が観察されたことが分かる。左図では狭い範囲ではあるが左上方に光沢斑が確認され、他は散散的に観察された。両刃であることをふまえると右手を使った両面での使用も考えられ、両面に右手親指が強く接触した可能性がある。

資料No.4

左図体部の一部にコーングロスパッチが確認できた。左図が主要面であると仮定すると、左図に多く光沢斑が現れる場合、右手の使用が考えられるが、完形品でないため明確に判断できない。

資料No.5

右図体部の一部と左図刃部にコーングロスパッチが確認できた。今回の資料の中では唯一、刃部に光沢が確認できた資料である。刃部形態から推定すると左図が主要面と考えられる。欠損しているため機能推定は難しいが、左図の刃部に光沢が現れていることから、右手使用の可能性が考えられる。

欠損したこととの因果関係は掴めないが、刃部の研ぎ直しが行われずに使用されなくなったと考えられる。

資料No.6

右図の一部にコーングロスパッチが確認できた。左図が主要面であると仮定すると、右図に強く光沢斑が現れる場